



TITLE:

海外日誌(二十五)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(二十五). 天界 1925, 5(51): 126-129

ISSUE DATE:

1925-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160231>

RIGHT:

海外日誌 (二十五)

山本一清

九月一日(月)

「労働祭日」で今日も休み日。それに暑いので、午前中は宿にゐたが午食後、外出して、程近い上街の日本大使館あたりから轉じて下町へ行き、國立博物館やスミソニアン學院の中をのぞいた後、リンカーン記念碑の廣場から、タイダル・レザリー・グラーの有名な日本櫻の並ぶあたりを歩いた後、歸宿。夜、大使館の雪下少佐に會ひ、自働車に乗せられて、ポトマク河の岸あたりまでドライブ。

九月二日(火)

二日續きの休日が明けて、今日は、朝九時半、早速、當市西北端の海軍天文臺を訪問。臺長アイクル・パーガー氏に迎えられ、本館を一巡した後、ハモンド氏に子午環室、リッテル大尉に寫真天頂管、それから、A・ホール氏に二十六時の大赤道儀、最後にB・G・H・タース氏に太陽觀測部を見せて貰つた。何と言つても、米國東岸にある随一の天文臺である。

午後、宿を引き拂ひ、驟雨を冒してカピトルやコンGRES圖書館の中を一巡した。近頃、日本人絶對排斥案を通過させた上院の演壇に立つた時は大なる感慨があつた。

午後五時半發、日没頃フイラデルフィア市に着いて、リッ・カールトン・ホテルに入る。

九月三日(水)

朝食後、二人でチェスナトやアーケットの街々を散歩し、有名な獨立紀念館の中などを見た後自分は汽車でスワースモアへ行き、其のあひだ、英子に見物乗合車に乗つて、市内を見まはることにする。

スワースモアへは十一時頃着。直ちに天文臺を訪ひ、臺長ミラー氏に二十四時赤道儀などの設備を見せて貰つた。ミラー氏は日食の熱心

家で、明後(一九二六)年一月には東洋スマトラの皆既食を觀測に行く由を語られ、「その節、日本を訪ねたいものです。あなたの都合が好ければ、スマトラまで一所に御出でになりませんか？」と誘はれた。勿論、自分はいきない。

臺長名代のキリアム君に午餐に招かれ、後、フイラデルフィアの宿に歸着。

午後三時、フイ市出發、ニウヨークへ歸る途中、四時半にプリンス・トンで下車。しげる樹々の下蔭を、早速、ハルズメッド天文臺を訪れ、又、轉じて學生用天文臺を訪れたが、臺長ラッセル氏もドウガン教授も不在であつた。休暇中のことであり、又、突然の訪問であつたので、それは仕方の無いこと。しかし、二人の婦人(計算係?)が……天文臺の内部を丁寧に案内せられ、別れぎほに、天文臺の最近の出版物を一部下さつたことなど、うれしかつた。かれて聞いている居たことながら、プリンス・トン大學の建築やキャンパスの美しいこと。こ

で、賀川君が嘗つて勉強せられたことなどを思ひ出す。

午後八時、ニウヨーク着。ブロード・エーに近いプレスリン・ホテルに入る。

九月四日(木)

朝食後、先づ濱の第十四突堤へ行き、荷物の運送の件を依頼。それから、ブロード・エーを歩いて、日本總領事館、住友銀行、ドイツ領事館、日本郵船會社の順にまはつて、それ／＼用事をすませ、パテリ公園や水族館を見、ひる食の後は有名なウルチアス・ビルディングの最高點まで昇つて、世界を見下す。五十八階の此の天上から見ると、人間社會の小さなこと!!

夕方、散歩。マデソン廣場で、英子は街頭天文家の望遠鏡で月を觀望した。見料金五仙也。時に取つての一興と言ふもの。

九月五日(金)

買物のため、ヘラルド廣場へ行き、「だるま」で食事中、キリアム・フルベキといふ日本好きの米人に會つた。此の人は日本で生れ、父は有名な日本開拓者フルベキ氏であつたといふ。不思議な人を知つたも

のだ。午後、英子を案内して大中央停車場へ行き、大ホールの天井に描かれてある星座の二重の誤り(昨年末自分が発見したもの)を見せ、それから、東三十七街の日本人館に小林喜十郎氏を訪ね、次で又案内されて近くの清水牧師を訪ね、夜十時頃、宿に歸る。

九月六日(土)

ニウヨークは余り大きくて、それに、見物する所が余りに貧弱で、我々には失望である。今日も、終日、買物などに暮し、午後には活動畫を見る。

夜、宿へ。小林氏來訪。

九月七日(日)

朝十一時、第五街長老教會で禮拜。イングリシ氏の説教。

午後二時から、小林氏に案内されて、科學博物館や美術館を見たのち、ブロンクスの大動物園を見に行つた。此の動物園も、可なり大きくはあるが、設備の點に於いて、まだ未成品らしいものが多かった。

九月八日(月)

朝、自分はステツケルト、英子はワナメーカーへ、それぞれ買ひ物に行き、それから轉じて、市街の北邊コロンビア大學の内外やグラント將軍の墓あたりを散歩、河岸をバスに乗つて宿に歸る。

午後二時、宿を引き拂ひ、小林氏に見送られて、第五十七突堤より豫定のフレンチ線船デ・グラスに乗り込む。室は第二五〇番。新造の二万噸ケビン船で、總への點に氣持ちが好い。

午後五時二十分いよいよ出帆。大ニウヨーク多くの摩天樓に飾られた濱の夕景色をあざにして、正味二年間暮した米國を去る。船は三色旗に守られた佛國船で、まもなく始まつた夕食の卓上には既に赤青の酒が盛られる。夜はサローンでコンサート。右舷に大きな火星を見つ。

九月九日(火)

専ら米佛の間を通ふ船であるに拘らず、船内では案外英語が自由に通用しない。ボーイたちには手まれ付きの怪しいフランス語で用事をする必要がある。——朝六時入浴、八時食事、十時音樂會、正午に晝

食、午後三時から音樂又は活動寫眞會、小供たちには人形芝居、それからテイ、六時に晚餐、九時から音樂會、それが十時からは舞踏會にかはる。これを今後毎日の行事として。

今日の正午の船の位置、北緯四十度四十分、西經六十七度四十九分午後、甲板から近く鯨の游泳するを見る。

九月十日(水)

今日から船で朝刊新聞ラトランテックが發行される。廣告を主としたもので、毎日、無線電信で得られた世界の近信が少しづつ載る程度のものであるが、之れでも船中の無聊を慰めるには大切なもので、朝れ坊には手に入りられるほどの歡迎ぶり。

夕方から東風強く、波をあげ、空は雨模様。

船の位置、(正午)、北緯四十一度二十四分、西經五十九度四十分。平均速力毎時十六哩。

九月十一日(木)

船のゆるるぜいもあつて、英子は午前中就床、但し自ら「朝れの續きです」と豪勢ぶつてゐる。海は快晴、夕方から霧。自分は事務長からベデカー案内書を借りて、パリの市街を研究し始める。

正午の船の位置、北緯四十二度十六分、西經五十一度六分。

九月十二日(金)

空は晴れてゐるが、東北東の風が可なりあつて、船は五六度ほど傾く。

船の正午の位置、北緯四十四度三十八分、西經四十二分三十五分。

九月十三日(土)

波高なので英子は終日就床。但し口では元氣なことを言つてゐる。それで居て、デインナーは、やはり、床の中。

来る十六日から獨逸ライプツヒに開かれる天文協會(AG)に、たゞひ少し位は遅れても、自分には非出席する積りで、今日までは意氣込んでゐたが、よく考へて見、又、佛獨間の汽車の都合など研究して見ると、十八日の夕方にベルリンへ着くことさへも危ふくなつたので殘

念ながら、此の獨逸人りを斷然止すことに決定す。

船の正午の位置、北緯四十六度五十六分、西經三十四度二十分。

九月 四日(日)

波止まず、船は左右へ十度傾くやうになつたけれど、吾々兩人は少しは馴れたものか、気分好くて、床から起き上つて了つた。

日曜ではあるが、船客は皆フランス式の不信仰者ばかりと見えて、禮拜も何も無し。夜更けるの舞踏會は中止されたが、之れは船の傾斜が甚だしくて、とても踊れないからであつた。

正午の船の位置、北緯四十八度三十六分、西經二十五度十二分。

九月十五日(月)

もはや航海の末も短くなつて來て、今日は吾々も船倉で荷物の取り纏めなごした。同時に、船客相互の親しみも増して來た。今夜は假裝ダンスが催される筈で、皆晝の内からはしやぎ、夕食の時には一同、紙のボンネットを冠つて食卓についたりした。しかし船窓の外は、やはり、廣々とした空と海のみで、出帆以來何物も見えず、人間社會からは全く縁を切られたやうな淋しさであつた。たま／＼、午後八時半、我が船が小運船を追ひ抜き、互ひにハンケチを振つて相圖し合つたのが乗船者一同の心を引き立てた。

正午の船の位置、北緯四十九度四十二分、西經十五度四十三分。

九月十六日(火)

いよいよ到着の日が近くなつたので、一同、何となくざわつく。正午頃より船の左右には漁舟を多く見受けるやうになり、歐洲の岸が近いことな思はせられた。午後一時半には英國のリガード岬をばるか左舷に望み、いよいよ船は英佛海峡に入る。風は西の弱風となり、波も納まつた。夜半、フランス海岸の燈火を見る。

正午の位置、北緯四十九度四十三分、西經五度四十四分。

九月十七日(水)

昨夜々半過ぎ、船はアーグルの燈臺を目あてに其の港へ近づく。「いよ／＼フランスだ」と思ふと、自分は、一昨年の秋、太平洋を超へてカナダの岸に近づいた時と同じく、嬉しくて眠れない。ケビンの

三四

窓から海を眺め／＼した。夜のあける頃、少しく眠つたと思つて、ふさ眼をさまして見ると、既に吾々はアーグルの港内に碇泊してゐる。特別の時間割で、今日は朝食が六時。七時過ぎからは旅券の検査、つゞいて税關吏の手荷物検査。之れで、いよ／＼上陸許可となる。船客は殆んど全部、特別仕立ての急行列車で、八時四十分發、パリに向ふ。

アーグルを出て、ルーアンを経てパリまで、セーヌ河のうるほす平野を、東へ／＼、ひた走りに走る。一刻々々、花のバリへ近づくのがさ思ふ心の中は嬉しかつたが、此の豫想の喜びに幾倍して、案外な喜悅は、列車の窓外を走るノルマンティの青々とした野の景色であつた。自分にして見れば、日本を出て以來二年以上も過した北米の野山は、大は大自然といへども、野に草少なく、山に樹乏しい殺風景なものであつた。馴れて、近頃は幾分感になくなつたさはいへ、無意識中にも存してゐた一種の淋しみは、今、到る所、人の手に育てられて青々と美しい装ひをなす此の北フランスの景色によつて、始めて甦へつたように感じる。

汽車は、正午過ぎ半時、パリのサン・ラザール停車場に着かれて研究して置いたパリの地理をなによりに、早速、地下電車でエトワルに行き、クレイベル街のホテル・マセステグに入る。

午後は大使館を訪ね、次でサン・ラザール驛で大きな荷物類の税關検査を終、夕方、ホテル・アンテルナショナルに京都から來着の大谷松山兩教授を訪問。たま／＼同所で同志社からの大塚恒藤兩氏にも會つた。不思議な會合！

夜はシャンゼリセを散歩。

九月十八日(木)

近々スペイン行き準備として、モンマルトルの一品で大急ぎジャクトを一着注文、夕方には假縫ひといふ早やわぞ。

午後、松山氏等のホテル「アンテル」へ吾々も移轉。夜、散歩して、オペラ附近からイタリヤ街のあたりを歩いたが、こうした街路のおもての夜景はニウヨークのアロードエーの方が盛んで

ある、但しうらは知らないが。

九月十九日(金)

スペイン行きの日が近いので、パリに滞在はしてゐるものの、落付いた見物などは出来ない。今日も朝から、銀行や、領事館や、旅行會社などへ行って、ひたすら大陸旅行の準備。しかし、かうした仕事が、どん／＼済んで行くのは氣持が良かった。

夜、また、シヤンゼリゼリを散歩。

九月二十日(土)

朝、一寸の暇を利用して、トロカテロの博物館、それからアイフエル塔あたりまでの廣い公園を見、真にパリらしい晴れ／＼した氣持になる。正午、遂上、ラオス街に永井氏を訪ひ、午後は又イタリヤ街からオペラ街あたりで、靴やシャツや帽子など、又も旅行準備。夕方には注文の服も出来上つて、準備は殆んど完成した。

九月二十一日(日)

今日はスペインへ向け出發する筈であつたが、田中館博士がオランダから來着されたと聞き、吾々は出發を中止して、松山大谷兩氏と共にホテル・イエナに同博士を訪ね、可なり時間をかけて、來るマドリド會議のプログラムを研究。

午後は荷作り。夜は偶々會つた眞下氏に案内されて、イタリヤ街の散歩をした。

四月の天象

助教授理學士 上 田 穰

太陽 魚星座より牡羊星座に移る。

一日正午

一六日正午

赤經 〇時三十八分

一時三三分

赤緯 (十)四度一八分

(十)九度五四分

視半徑 一六分〇二秒
水平視差 八秒八〇

一五分五八秒
八秒七七

月

上弦

一日一七時一二分

滿月

九日一二時三三分

下弦

一六日〇八時四〇分

新月

二三日一八時二八分

最近

一日一八時八分

最遠

一四日〇七時二二

水星

二九日一四時〇〇

魚星座より牡羊星座に入れど、すぐ逆行して魚星座に戻る。上中旬は宵の星にて下旬は曉の星なり。

八日二一時留となり、今迄の順行が轉じて逆行にうつる。

一九日〇二時太陽と内合をなし曉の星となる。

二五日一〇時黃道面を北より南に通過す。

一日〇時

一六日〇時

赤徑

一時四五分

赤緯 (十)一三度三九分

(十)一三度四九分

視半徑

三秒八三

五秒六〇

光級は月初(十)〇・三等より段々衰へ一九日頃(十)三・一等級に達し其後漸次光度を恢復して月末には(十)一・七等に至る。

金星 曉の星なり。月の終りに至つて宵の星となる。魚星座より順行して鯨星座に入る。

赤經 〇時一八分

(十)〇度二五分

一時二七分

赤緯 (十)〇度二五分

(十)七度四九分

視半徑

四秒九一

四秒八七

二四日一〇時太陽と外合をなし以後宵の星となる。

光級は引續き(一)三・四等を保ちて下半月には更に(一)三・五等となる

火星

牡牛星座を順行する夕方の星なり。

三五